

第3回 学生懸賞未来社会エッセイコンテストについて

2021年3月10日

公益社団法人都市住宅学会関東支部

学生懸賞未来社会エッセイコンテスト審査委員長 大佛俊泰

<総評>

都市住宅学会関東支部では、独自の企画として学生懸賞未来社会エッセイコンテストを実施しています。第3回目となる今年度のエッセイコンテストでは、新型コロナウイルス感染症の影響が心配されましたが、最終的には学部生部門9作品、大学院生部門4作品の応募がありました。エッセイコンテストでは、研究論文のようなやや堅苦しいスタイルではなく、学生諸子が平時から疑問に感じていること、不満に感じていることなどを背景として、将来の社会・都市・住宅・生活に関わる夢や希望について、自由で独創的な着想をもとに論じて頂くことを期待しています。今年度の応募作品の中には、新型コロナウイルス感染症が契機となって心に浮かんだことをテーマにしたものが多く、コロナ禍が学生諸子にとっても重大なイベントであったことが現れています。

このエッセイコンテストでは、学際領域である都市住宅学会の特徴を反映させるために、都市・建築・法律・経済といった、それぞれ専門分野を異にする審査員によって審議しています。今年度は、学部生部門と大学院生部門からそれぞれ3点を表彰対象作品として選出しました。いずれの作品も学生の生き生きとした目線から観察、考察、評価、提案がなされており、熱い気持ちがかもったエッセイであると評価されました。

以下では、表彰対象作品（最優秀賞、優秀賞、佳作）について概説しています。エッセイ全文についても公開しておりますので、ご一読いただければ幸いです。

【学部生部門】

●最優秀エッセイ1点（副賞：図書カード3万円）

・小田 もりか（東京工業大学） 「分散型の都市を目指して」

「分散型の都市を目指して」は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い大都市から地方への移住者が増加している点に着目し、昨今、大きな社会的関心事となっている少子高齢化による地方の弱体化の問題について再考したものです。入手可能な社会統計情報をひとつの根拠としながら、大学や企業の立地との関係、就業機会創出との関係、住宅価格やの居住費との関係、移住促進のための取り組み、そして、頻発する自然災害との関係など、多様な

視点から総合的に論じています。コロナ禍という危機的な状況をむしろチャンスと捉えて、都市と地方の関係、災害に強い都市・地域づくりについて考察しています。

●優秀エッセイ1点（副賞：図書カード1万円）

・塩崎 洸（東京大学） 「コロナウイルスとまちのムラ社会」

「コロナウイルスとまちのムラ社会」は、まず前半で、コロナ禍で発生した奇妙な社会的現象（一種の差別的行為）についての考察をとおして、「ムラ社会」の精神が現在も存続していることを確認し、日本各地で発生している「ムラ社会」的な特異現象の説明を試みます。さらに、後半では、「ムラ社会」の解釈を変更することで、人々が欲しているまちを実現できるかどうかについて論考を重ねています。具体的には、アメリカの心理学者マズローの欲求階層説に基づいて、理想のまちに人々が求めているものについて考察し、まちに対してムラ社会の精神を積極的な形で利用する方法に関して検討しています。コロナ禍で発生した奇妙な社会現象を冷静に読み解くだけでなく、まちやむらのあり方について提案するなど、一貫した論考がなされており、論理構成も優れている作品です。

●佳作エッセイ1点（副賞：図書カード3000円）

・五嶋 薫子（横浜国立大学） 「駅舎建築の保存活用からみるまちの世代継承」

「駅舎建築の保存活用からみるまちの世代継承」は、建物を保存し、まちの個性の継承につなげるためには何が必要であるのかということに関して、駅舎建築の保存を例にあげながら考察した作品です。駅舎が駅としての機能を終えたあとも、（無形の価値も含めて）その価値が次世代へ受け継がれるためには、どのような取り組みが必要であるのかについて、旧国立駅舎の成り立ちから一時解体を経て再築された現在までを振り返りながら、その価値について検証しています。近年では単に保存するだけでなく、用途を変えて保存した建物を積極的に活用していくことが求められている点に着目し、自分たちのものとして親みをもって扱われ、直接かかわることができるようなきっかけを作っていくことが必要であると論じています。

【大学院生部門】

●最優秀エッセイ1点（副賞：図書カード3万円）

・南 拓海（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府） 「意思の集積はやがてまちを創る」

「意思の集積はやがてまちを創る」は、新型コロナウイルス感染症の拡大を契機として、長崎における祖父の家やシェアハウスでの生活をとおして経験したこと、そして、その時々的心情の動きを丁寧に綴った作品です。長崎で体験した建築空間や人々の生活の様子などが生き生きと描写されており、小説のように描かれています。いつかは長崎に身を置いて建築の仕事に就こうとする決心に至るまでの、自分の心の動きについての冷静な考察を経て、「幾人もの『私』の『ここに住みたい』という強い意思の集積が、『私たち』が暮らしたいまちになるのだ」という主張にまで昇華されています。

●優秀エッセイ1点（副賞：図書カード1万円）

・田島 実紗（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府） 「高齢者が最期まで自分らしく暮らすことができるまち」

「高齢者が最期まで自分らしく暮らすことができるまち」は、「老後」をどのように捉え、「老後の暮らし」をどのように考えていくべきなのかについて論じた作品です。具体的には、老後の居住の場としての我が国における高齢者施設の問題点、さらに、既に実現している海外政策の事例を引用しながら、これからの新しい高齢期の住まいの在り方について考察しています。最期まで自分らしく暮らすことのできるまちこそが、本当に暮らしたいと思えるまちであるという信念をもとに論じられています。我が国においては、安心安全という部分に目を向けすぎて「自由」が必要以上に損なわれてしまっている点を指摘するなど、諸外国との比較をとおした気づきを与えています。最後に筆者は、高齢者が最期まで自分らしく暮らすことができるまちとして「地域包括ケア α 」という、まちの在り方を提案しています。

●佳作エッセイ1点（副賞：図書カード3000円）

・山波 向日葵（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府） 「まちと、出産施設と、母と子」

「まちと、出産施設と、母と子」は、里帰り出産をした人の多くが自分の住む地域のことをよく知らないまま支えなしの子育てに突入することの問題について考察した作品です。自分の母親の体験談から知ることになった、母親を取り巻く環境と未だ自らは経験してい

ない（これから経験するであろう）環境との間を行き来する不安な気持ちが描かれています。母親達がどのようなことに悩んでいるのか、その悩みや不安を地域として支えるにはどうしたら良いのか、どんなまちに母親は住むことを望んでいるのか、どんなサポートがあれば心地の良い家のままでいられるのか等について考えることが必要であると論じています。

（大佛俊泰）